

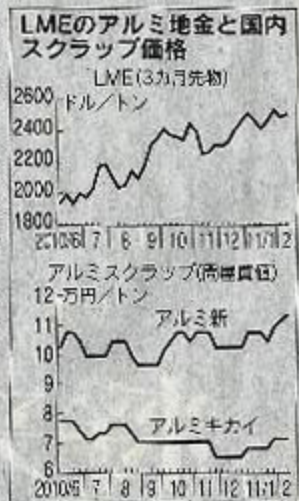
アルミニウム二次合金、圧延品といったアルミ製品業界が原料価格上昇への対応に苦慮している。地金の国際価格の上昇が続く半面、最終需要家である自動車や建材メーカーが帳簿恒上げの受け入れに対して厳しい姿勢を示しているためだ。値上げの浸透にはアルミ製品業界の能力過剰という懸念問題も立ちはだかる。

「自動車エンジンスクラップの買い取り価格を大幅に下げざるを得なくなる」。あるスクラップ問屋の社長は厳しい口調で話す。自動車のエンジンを利用するスクラップ、一アルミキカイの価格は1月に小幅高に転じたが昨夏に比べると依然安い。

一方、サッシなどを再利用する「アルミ新」と呼ばれるスクラップは昨年8月の安値に比べ18%値上がりした。東京地区・直納問屋買値は1万11千1百11円6千円が中心。成分などが新地金と近く、地金価格と連動しやすいためだ。アルミ新の高値がアルミキカイなど他の品種にも波及しかねない状況だ。

スクラップ問屋が粗原料の上昇圧力に身替える背景には販売先のアルミ二次合金メーカーの苦境がある。スクラップを使って再生地金を造る二次合金メーカー

アルミ業界、原料高に苦慮



地金・スクラップ上昇

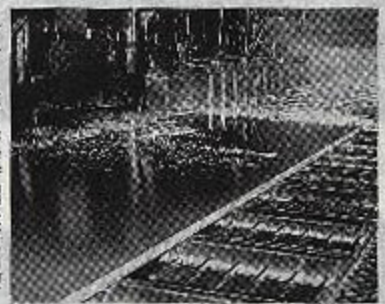
は「地金上昇分は青雲に反透している」(問屋)とこうだが、自動車など大口顧客が対象となる「ひも付き」は顧客の力が強へ、価格の上昇は鈍い。

圧延品を扱う問屋、萬世興業(東京・新恒)の横山順司取締役営業副本部長は「製品に何らかの付加価値をつけないと安値競争に巻き込まれる」と業界の現状を語る。

過当競争が起きるを懸念は国内需要の不振がある。自動車部品メーカーなどに十分転嫁できていない。一段の原料高は経営に与えるのかかるのは必至だ。

日本軽金属、住友軽金属工業など大手が並ぶ圧延品業界も事情は似ている。地金加工して板や箔にしたのが圧延品。スポーツ販売などの「店売り」については、需要量は前年比29%増と一見大幅に伸びた。しかし、市況で最多の07年と比べれば14%少ない。

圧延品の10年の出荷量も4年ぶりに前年実績を上下したが、最多だった07年比



アルミニウム圧延品業界は回復しているが...

二次合金、生産能力が過剰

原料高の転嫁がスムーズに進まない背景にはアルミ製品の生産能力の過剰がある。その代表がアルミ二次合金だ。

国内月間生産量の直近のピークが08年7月の9万8千ト。現在の水準はその70%程度だ。生産能力の削減は進んでおらず、30%程度

は能力が過剰といえる。メーカーは最大手の大紀アルミニウム工業所のほか、大小合わせて国内に100社あるといわれ、過当競争体質も指摘されている。

需給ギャップが生まれた。背景には自動車や部品メーカーが新興国に工場を移転

価格転嫁に需要不振の壁

ではどの程度少ない。為替の円高基調もあり、国内需要がどの程度回復するかは不透明だ。

一方、地金の国際価格の上昇は続く。指標となるロンドン金属取引所(LME)の3カ月先物公示価格は現在、1万2500ドル前後。昨年の安値に比べ30%以上高い。米国の金融緩和による余剰資金流入と中国など新興国需要の拡大が上昇要因だ。

アルミ地金は供給面でも不安を抱える。大層生産を続けた中国は電力供給抑制の影響で生産が伸び悩む可能性がある。供給が一段と引き締まる可能性も否定できない。

同じ非鉄金属の前が今年に入り最高値を何度も更新しているのに比べ、アルミは08年7月につけた最高値からは約1割以上安い。鋼に比べた利安感も一段の値上がり観測を生んでいる。

アフレで最終製品に原料や素材価格の上昇分を転嫁するのが難しい環境は長期化しそうだ。「価格上昇のスクの押しつけ合い」(橋本アルミの橋本健一部長)の構図からの脱却策を業界は思いついておらずにいる。

は変わりそうにない。今回の原料高について業界大手でさえ「生き残りをかけて製品価格に反映していく」(サミット昭和アルミの鈴木良彦社長)と危機感をあらわにする。

業界は様々な構造問題を抱えているだけに、値上げの成否によっては中小中心に淘汰を迫られるメーカーが多く出る可能性もある。

ユーザー工場、海外に移転

ユーザー工場、海外に移転